



堅田の町なみ

滋賀県立大学人間文化学部
助教授 濱崎 一志

琵琶湖と堅田

堅田は北湖と南湖にわかれる琵琶湖の、もっとも狭くくびれた部分の西岸に位置しています。堅田の集落は、比叡山から流れ出る天神川・真野川の沖積三角州の端に、琵琶湖岸に沿うように展開されてきました。ここはもともと琵琶湖と内湖と水路で囲まれた島状の地でした。堅田と琵琶湖の深い関係はこの立地に由来しています。

古来、堅田は琵琶湖の水運、漁業、湖上権をその糧として栄えてきました。琵琶湖のくびれた部分に位置する堅田は対岸にわたる渡し場として、また絶好の舟どまりとして湖上交通の要衝となっただけでなく、湖北から坂本や大津に向かう舟を襲い通行料を取ることにより、その繁栄を勝ち取ってきました。このため堅田湖賊とか湖上の海賊とよばれ、周辺の漁師や舟人から恐れられていました。中世には、堅田関で「^{うわの}上乗り」すなわち舟運の水先案内をして関料を徴収する権利を得て、堅田は大いに繁栄し「堅田千軒」とよばれたほどでした。

堅田の住民は殿原衆、全人と客人、旅人、譜代下人、下人などの地下人から構成されていました。殿原衆はカタタ侍ともいわれ山門はもちろん、京極・六角の戦国武将にも屈しない地侍で、居初、刀弥、小月の三氏がそれぞれ党をくみ、鎮守伊豆神社の宮座組織をもち、湖上の支配権をにぎっていました。全人衆は地下本来の百姓であり、自営し成長しつづけた農民、商人や手工業者であり、堅田の町民を構成する主体となった人々です。

このほか堅田には麁屋、油屋、鍛冶屋、研屋、番匠、紺屋、糸屋、具足屋、塩・米麦豆・瓜などの各種の技術者やそれを売る商人がいました。これらの商人や手工業者のなかから、日本海一帯に進出して活躍する有徳の人が輩出し、堅田は非常に栄えていました。

応仁2(1468)年3月、比叡山の僧徒がその意に従わない堅田を攻撃しました。この応仁年間の「堅田大責」にあたって、「城ノキワヘ敵ツメ」(『本福寺由来記』)「敵ノ諸勢堀ノキハマテトリヨルヲ」(『本福寺跡書』)とあり、堅田の人々が城を構え懸命になって応戦した様子がわかります。この戦いで破れたも



図1 堅田の集落 (縮尺1/20,000)

の、堅田はその周りに環濠をもつ城塞都市としての機能を十分にはたしていたことがわかります。敗れた堅田の人々は、いったん沖の島へ退避しましたが、やがてその経済力にものをいわせて文明年間には堅田へもどってきます。こうした苦難と危急をのりこえるなかで、全人衆は殿原衆と協力して堅田を自治的に運営するようになりました。

応仁の堅田大責以降、「堅田三方トハ北ノ切、東ノ切、西ノ切ナリ。四方トハ今堅田ヲクワヘテイフ」と、堅田は宮ノ切（北ノ切）、東ノ切、西ノ切と今堅田の4地区にわけてよばれています（図1）。戦国時代の絵師土佐光茂が原本を描いたと考えられている『堅田（片田）景図』模本（東京国立博物館蔵）には、藁葺きや板葺きの家々が建ちならんだ堅田の当時の様子が描かれています。それぞれの地区の入口に門を構え、塀や柵で囲み外敵に備えた姿を見ることができます。近世末期の堅田千軒絵図、近世の地籍図をみても、堅田は今堅田も含めて四地区にわかれ、それぞれが堀割で区画され、湖畔の環濠城塞都市の特色をよく示しています。

近世になると自衛的機能は否定され、自治的運営も制限をうけましたが、中世にひきつき漁業、廻漕業の特権をえて、中世以来の文化的伝統が大きく花ひらきました。その一つは茶道文化であり、他は俳諧です。茶道文化は中世の殿原衆と系譜的につながる郷士たちによって担われ、彼らの檀那寺である祥瑞

寺がその中心でした。その堅田の茶道文化の昂揚の頂点をなすのが、後述する「天然图画亭」です。いっぽう、俳諧は主として中世の全人衆の後裔である自営の本百姓らによって担われ、彼らが帰依してきた本福寺がその中心となりました。

ところで、堅田といえば誰しも湖中に浮んだ宝形造りのちいさな堂（浮御堂）を思いだします（図2）。前に琵琶湖、後に比良の山なみをひかえ、湖面にその姿を映す御堂と、一面に茂った葭の中をわたる長い橋には独特の風情があります。「比良の暮雪」とともに、「堅田の落雁」と近江八景の一つにうたわれたところです。平安時代に、比叡山横川の恵心僧都が湖上交通の安全と衆生濟度をねがって建立したのにはじまるといわれています。浮御堂の正面は湖側であり、湖と密接に結びついで堅田の生活を示す文化財です。

堅田の町並み

堅田の町は、琵琶湖岸に平行する通りに沿って家なみが形成されています。文政9（1826）年の町絵図をみると、今の妙盛寺の横が町の入口にあたることがわかります（図1）。そこから東へ満月寺浮御堂に至り、北へ折れて今堅田の方へ向かう道がメインストリートでした。西ノ切、宮ノ切、東ノ切を結んであわせた道です。もっとも、現在では図1のように柳田、神辺、永楽、耕豊の旧字名で堅田の町を区分しています。

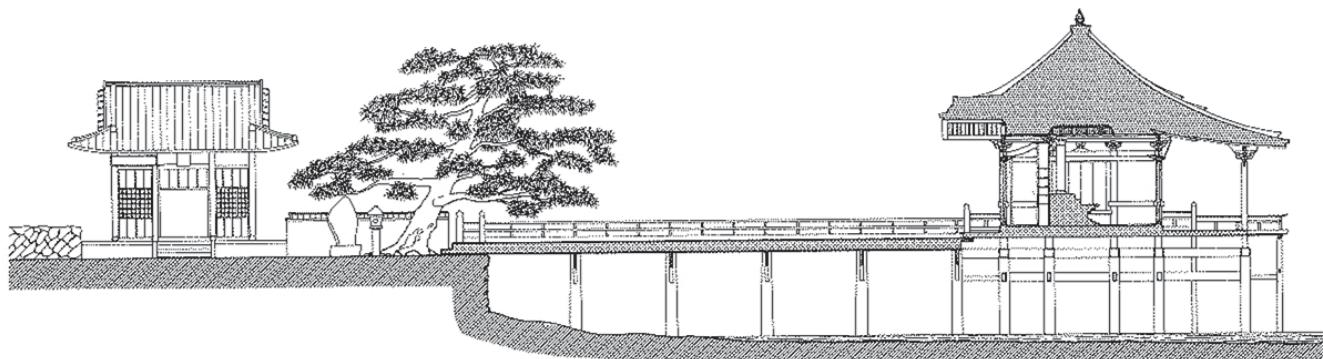


図2 堅田の浮御堂断面図（縮尺1/300）

堅田の町なみの大きな特徴は、妻入り（図3）と平入り（図4）の町家が混在すること、地区によって妻入りと平入りの割合が違い町なみの表情が違うことなどがあげられます。

また、琵琶湖に接していた地区では建ちならぶ家々の間に琵琶湖岸に向かう小路が幾筋もあります。こうした小路は漁村の特徴ですが、これらの小路から琵琶湖に通じる細長い空間が広がり、町なみに変化を与えていることも特徴のひとつです。湖岸に面した家々を湖からみると、防波堤としての石垣が連なる中に、各家から岸辺に降りる階段が設けられています。以前はこの階段を降りたところに「はしいた」とよばれる洗い物をする場所が琵琶湖に張り出して、設けられていました。こうした景観は琵琶湖総合開発計画にともなう護岸工事で大きく変貌していますが、あちこちでその名残をみることができます。

また、堅田では雪や雨から壁の下部を保護するため、町家や堀の腰に板を張り付けていますがこの板壁が白壁と見事なコントラストをなし、町なみ景観を際だたせています。

妙盛寺から、柳田・神辺・永楽・小番城を結んで老ケ川に至る通りは、静かで落ちついたたたずまいを見せてています。この町なみを南から順にみてみます。堅田では多様な職種の人々が混住していますが、柳田から神辺にかけての通りに面しては、店を構えた家は少なかったようです。妙盛寺観音堂前の道沿いは間口の広い家や堀で囲まれた家が多く、密

集度は低くなっています。逆に露地をはいると密集度が高く、農漁村的な集落のたたずまいをみせています。

図3は表通りに面する妻入りの民家の立面図です。玄関から奥の座敷にかけてかけられた屋根が通りに妻面をみせ、土間部分だけが平入りとなって居室部分と接続しています。幕末ごろの家と考えられますが、立面の意匠はさらに後のものと考えられます。この通りでは、他に平入り民家も多いのですが、図3のように、妻面をみせる立面の意匠が印象的です。このあたりは、堅田の町なみの中でも、伝統的な意匠がよく残っている地区です。

伊豆神社東側から、祥瑞寺前、大橋のかかる船入りまでは、幕末まで陣屋の屋敷地だったところです。現在の家並みそのものはやや散漫ですが、路傍に地蔵堂や鳥居があつたり、前栽越しに戦前の洋風住宅の外観を見せたりして、変化のある通りです。

神辺と永楽との境をなす堀と船入り周辺はつい最近まで対岸へ渡る船が発着していました。町の旧家辻家の出格子をそなえた外観もここに面しています。現在、堀や舟入りは小さな公園として整備されています。堅田の歴史的なシンボル空間として、周辺の町なみも含めて修景保全したい場所です。

船入りから北へは永楽の通りです。一時代前の中心街だったらしく、いくつかの老舗をはじめ、市場的雰囲気をとどめ商家がつづきます。やがて通りの東側つまり湖側に、白壁

の妻面を見せる2棟の土蔵にはさまれた広い間口の旧家が目にとまります。妻入りの主屋の前面に奥行きのある下屋をおろし、一見平入りに見えますが、奥に鬼瓦をのせた妻面がのぞいています。手入れがゆきとどいた土蔵の白壁が、くずれつつある永楽の町なみの中で印象的です。主屋と土蔵の間の露地口に「天然图画亭」の石碑がたっています。滋賀県



図3 妻入りの町家（縮尺1/150）

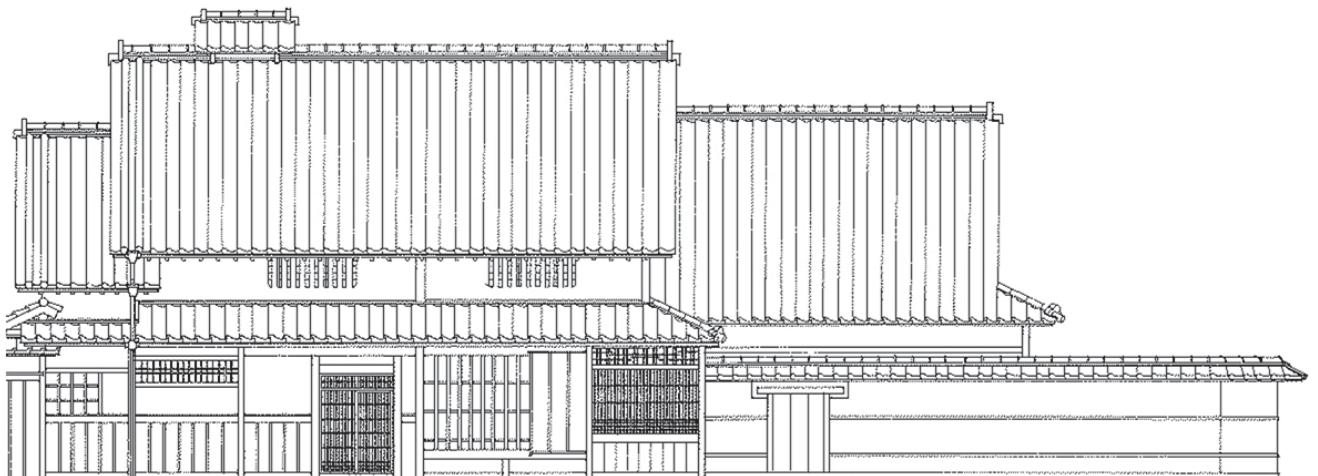


図4 小畠城の町家 立面図（縮尺1/150）

の指定文化財である天然図画亭とよばれる建物とその庭園です。天然図画亭は、茶人藤村庸軒とその門人である北村幽安によって、天和元（1681）年ごろに居初氏の邸内につくられました。典型的な書院式露地の庭で、飛石、石敷、刈り込みがたくみに配され、東に蓬萊山枯山水がおかれ、琵琶湖をへだて対岸の三上山・鏡山をはじめ湖東から湖南にかけての連山が借景としてうまくとりいれられています。こうした湖を取り入れた空間構成は、天然図画亭に限らず、湖に面した堅田の住居の特色のひとつです。

小畠城の通りは、両側とも、京都の町家を思わせる意匠をもつ民家がよくのこっています。図4は、3代ほど前まで京都に呉服店を出していたという商家の本宅です。堅田でも最も洗練された意匠をもつ町家のひとつです。

この通りに妻入りは見られません。それだけによく保全された町なみは京都的です。福聚禪院の門構えと松の老木で終わるこの町なみは、延長300メートルほどにわたります。

堅田では各家の職業とは別に、屋号をもつ家が多く、その名称と由緒を調べてみると、約半数が屋号を持ち、その内訳から大工などの職人から、酒屋・呉服商などの商人、さらには漁師まで、多様な職種にわたる人々の住居が混在していたことがわかりました。こうした職種の多様さが、町なみ景観の多様さに

反映されていると考えられます。

伝統的な外観を保存している家は、柳田と小畠城両地区に集中しています。ただし、両地区的たたずまいはかなり異質なものです。ひと言でいえば柳田は田舎的、小畠城は町的といえます。小畠城の家々の意匠は、京都で洗練されたものが直接に影響を及ぼしているように見え、一方、柳田の妻入り、平入りの混在する家並みは、この地方固有の民家の伝統が色濃く土着的な性格が強いと考えられます。現在でも町中にのこるくす屋民家は妻入り形式で、平入りの町家の意匠は他地域から進出して、やがて堅田の中で取り入れられ、多数をしめるようになったと考えられます。

この小さな堅田の町の中だけでも、多様な民家の形式、多様な町なみの雰囲気をみることができます。そして、こうした町なみが、堅田を取り囲む水路や堀とともに堅田の歴史的環境を構成しているわけです。こうした歴史的環境の保全が、これからの大変な課題です。

滋賀文化財教室シリーズ No.156号

発行年月日 1995年12月20日
編集・発行 財團法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525